

お為とお馬、

そして梅野、お歌

戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南区三二五)

結婚した相手が「宇山」の出身。それならばと、初入り(近所の挨拶回り) 早々、安藤家の比翼塚を訪ねたのが二十五年前。案外地元の人でさえ二人には無関心で、連れ合いもそんな話なのかなあ・・・という程度。まだ、足腰が丈夫だった大姑に案内されて、二人が心中したと言われる「城の腰」という場所(以前は大きな松がそばえ、戦前にはお地蔵さんがあったという)は、以外にも安藤家のすぐ近くでした。

この二人の物語を知れば知るほど、そして、近世・中世の歴史をほんの少し頭に入れて考えると、何か釈然としないのは私だけなのでしょうか。

私の実家の祖先は延岡(内藤藩)の武士。しかも上級

武士だったと言うのですが、維新、そして戦後のドサクサで、ほとんど、うやむやになったままだったのが、歴史好きの父、そして長女の私の代になって再三、延岡の三川内という所へ、調査に行った事があります。井上家の男性がほとんど短命な上、代々子供が少なく、その上女性達が、当時としては破天荒な生き方をした事が解かり、その話が「お為」との生き方の差を感じてしまったからです。

父から五・六代前の方が江戸詰めであった頃、町人の娘と恋におち、大騒ぎになったというのです。きつと心中口説きの中にある「忍ぶ恋路にや難所が御座る、義理のしがらみ人目の関所、関所守る目の赦さぬものは」で、結果はというと、しかるべき藩士の養女という事で、型を整え、はるばる江戸から九州の田舎へお嫁入り。大淀川を渡って行く姿が綺麗だったという話が地元では伝わっています。名前は「梅野」というそうです。

又、維新後、旧領であった三川内で、タケノコ?生活のような事をしている時、出入りの商人(刀や鎧を扱う)の方と、当主の若後家さん(お歌)がかけおちしてしまふという事件も起きています。しゅうとにあたる方が、

槍を畳の上に突き刺して、猛反対したという話は、調査に行った三十年前に、地元九十歳だったおばあさんが話してくれました。三川内に置いて来た男の子は成人すると母親の住む佐伯へと移り、その子が父の父、私から見れば祖父にあたります。その「お歌」さんの嫁ぎ先は、故保田善作氏のおじさんにあたる方で、今でも井上家と保田家は親しいお付き合いをさせていただいています。父が三歳の時に亡くなった祖父、父は顔さえ覚えていないらしいのですが、延岡中学第一期生で、あの若山牧水と同期だったそうです。

「梅野」さんも「お歌」さんも、とても共感できるステキな女性です。だって、身分とかいうものをひよいと越えてしまったんですから、その強さを感じます。

江戸時代は身分制度というものがあって、がんじがらめにされていたというのにはある意味で嘘です。すべてにおいて、現代以上に融通がきいた時代でもあります。

特に男女の結びつきは。あの將軍家ですら母親の身分はというと、忍者の娘（二代）、古着屋の娘（四代）、八百屋の娘（五代）、町医者（七代）、そしてあの八代將軍吉宗は、お為と同じ山伏の娘なのです。（すべて、

諸説はありますが。）

ただし、体裁は整わなければならないので、しかるべき人の養女という形になっているだけのことです。

逆にいえば、周りの誰かが知恵を働かせていれば、ひよっとして心中までは至らなかつたのではないかと、というのが、私の推論です。

それから、もう一つの疑問。「修験者」（山伏）という地位についてです。

現代人からみれば、医者と山伏は水と油のように思われがちですし、「お為半蔵」を語る人のすべてが、身分の違いを指摘しています。けれども、医学と宗教とが、はつきり分かれたのは、ずつと後の明治以降のこと、医学部も医師免許も無かつた当時は、卑弥呼の昔から宗教と医学は深く結びつき、僧・神主あるいは修験者と呼ばれる人々が尊敬を集め、医術に秀でた集団だったのです。

江戸時代になって、中国やオランダから西洋の医学が入って来ても、従来の医術集団も存在し続けたのです。二人の身分の差というより、医術のお為の家と医学の半蔵の家の反目のような気がします。医学が医術の数段上といえるのは、今だからこそなのです。

特に「修験者」といわれた人々のもたらす文化は、遠くに熊野信仰、近くには四国、そして国東半島と、未だに目にする方々で、人々は尊敬と畏敬の念をもって接し、彼らのもたらす情報・化学そして薬等々、全国津々浦々にもたらしたと思います。

お為の実家の柳正院が明治になって、偽札造りが発覚し、亡びてしまったらしいのですが、逆にいえば、あの心中事件後も家そのものは栄え、続いて行ったことになります。

だから彼女が「よそ者の修験者の娘」なので身分違いの恋というのも、納得がいかない理由の一つです。

最後に半蔵の生家ですが、安藤家が、大友家の宗家を継いでもいい立場にいた十一代目の方を祖先とする家系であることは、心中口説きにある「家が大事か女房が先か、由緒正しい、わがしの系図」と言われるとおり、立派な家系であったのは事実ですが、そのプライドは、当時の社会状況から見るとどうだったのかを頭に入れておく必要があります。

事件のあった二六〇年前は、堅田は毛利(佐伯)藩でした。しかし、五十年前から柏江は天領。宇山も安藤家

が元々住んでいた川井も天領ではありません。

今も語り継がれる郷土史のヒーロー、佐伯惟治は大友家より謀反の疑いをかけられ、堅田・青山を通つて尾高知へと逃げていきました。

十四代惟定の時には、大友家改易のとぼつちりを受けて、領地は召し上げ、佐伯氏はごくわずかな家来を連れて、宇和島、さらに津へと佐伯一族は去っていきました。中には、佐伯にとどまった家来もたくさんいたと資料にはあります。染矢・高畑・柳井といった方々は、やがて自分の領地であった所にそのまま残り大庄屋となり、それが地名となった所もあります。その佐伯氏は、大神氏を祖とし、遠く神代にまでさかのぼるルーツを持っています。

中世・近世の農民は、領主が変わっても原則として付いて行きます。では、その農民はというと豊田秀吉が刀狩りを行う以前は、武士イコール農民でした。

二人が生きていた時代のお爺さんの代までは、領主といえ、佐伯氏だったので。神代の昔から。

以上の事を考えれば、二人の家どちらかがよそ者であったかといえ、あながち、お為の家ばかりとは、い

えないのではないのか?と思います。

そして、もう一つ、柏江は天領という特殊事情の土地という事です。

堅田谷の中で、江戸時代になって急激に発展、しかも、諸国からの人や物の出入り(商業)によって栄えた所です。本来の意味の「よそ者」も移り住んでいた事でしよう。

二人の事を見聞きした人こそ「よそ者」ではなかったのか、もっとはつきり言えば、堅田地方の歴史的背景を知らない人が書いたとしか思われなないのです。二週間位で書き上げたといわれる心中口説きは、あまりにも流れるような文体で美しく、良く出来すぎます。五月十日が事件があった日なので、初盆に合わせたのでしょうか……。

以上が、「お為半蔵」特に、お為の身分にこだわった私の考察です。

どなたか、お為について詳しく知っている方、教えてください。

※同じ宇山に住んでいる私の友人で、大谷さんという方がいらつしやいます。彼女の故郷でもある高知県の、

こんな面白い話を聞かせてくれました。有名な「よさこい節」の一節、「土佐の高知の、はりまや橋で坊さん、かんざし買うを見た」は実話だったんだそうです。

お坊さんの純信と、洗濯女のお馬との恋愛事件。しかも二人は発覚と同時に関所を破り、かけおちします。けれど、追手に捕まり城下で三日間さらされ、国外へ追放となったというのです。

その後、お馬は人の監視下に置かれ生活するうちに、土地の犬工さんと結婚。一方、純信も、追放先で寺子屋の先生を務めたというのです。

「二人は自由を求め、逃避行で生きようとしたそれが土佐っぴ氣質。自己を主張し、自分の心を大切にする風土が、坂本龍馬を生み、自由民権運動の発祥の地となったんよ」と熱く語ってくれました。

一昨年の夏「よさこい祭り」を見学し、そのリズム感といい、躍動感といい、子どもからお年寄りまで楽しんで、町起こしにもなっています。素地は、やはり二人の生き方に共鳴し、誇れるからでしょうね。

現代人が、正しい当時の認識に立って歴史を見る事は時間も知識も必要だということを実感しました。